

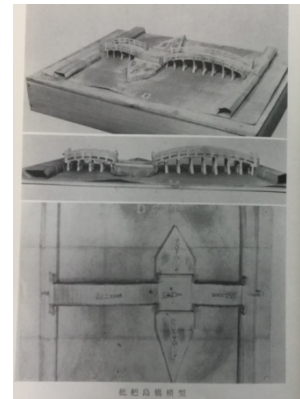
## 枇杷島橋

西枇杷島町史の「町の文化」に注目した。執筆していたのが、若き日の日本史研究の小島広次先生だったからだ。名古屋市立女子短大に勤めた頃、所属する経済科でお世話になった。とにかく地元の歴史に詳しかったことを覚えている。

枇杷島橋を中心とした景色は、『尾張名所図会』が、「古今の騷人詞客も此境に到らぬはなくして、又、類なき勝景なり」と誇っているように、古くから、有名な文人墨客がおとずれた名勝の地であった。枇杷島橋周辺は、青物市や遠近の眺望だけでなく、橋自身が見事な景観であった。総檜木造りの大小二橋が中島をはさんでかかる変化のある構造であった。美濃路往還で東海道・中山道にも通じ、遠来の風流人士はもちろんのこと、名古屋城下の文化人たちが心身を洗う清遊の地であった。



枇杷島橋周辺からの遠望近景で知られていただけでなく、妙音院太政大臣藤原師長と井戸田の豪族横江左近之進ときかげの娘槐の悲恋物語の終曲地という伝承で有名であった。治承三年（1179）、平清盛のために、尾張国愛知郡井戸田に流された師長は槐と知りあったが、翌年、罪を許されて都に帰ることになった。別れを惜しんで土器野の里までついてきた槐に、守り本尊と「白菊」と名づけて愛玩した琵琶を形見にあたえた。槐は生別の悲しさのあまり、「四つの緒の調べも絶えて三瀬川沈み果てぬと君に伝えよ」と一首を残して入水したという悲恋物語である。このあとを琵琶池とよび、埋葬した場所が小場塚新田の琵琶塚といわれる。名勝のうえに旧跡もあり、一層、文化人や趣味人の来遊を誘った。



枇杷島橋周辺の景観を一層有名にしたのは、弘化二年（1845）藩命によって両堤に植えられた数千株の桜である。水防上、堤防には竹以外は植えないのが原則であったが、天明元年（1781）に楮が植えられ、村方に六割が下布されている。また、同五年に、「植え物」が命じられているが、品種はわかっていない。弘化に桜が植えられたのは、あきらかに、藩命による景観美造成のためであった。これ以後、文化人や風流人とよばれる人びとのほかに、春になると一般の名古屋人士の来遊も多くなった。

(2017年5月7日)